



でも、地方を創生していくためには、僕だけが何かをするのではなくて、僕以外の人が起点になってやっていけるようにしないと未来がない。そのためには、地方での起業家の育成と起業家の仲間を作ることが必要なんです。そうした環境作りの一環として、一般社団法人徳島イノベーションベース（TIB）を作り、徳島の人を中心に起業家に必要なことを学んでもらう取り組みをしています」

木頭は藤田さんのアイデンティティが根差す場所。

「僕としては、みんなに木頭の将来への期待と希望を持ってほしい。将来に可能性があると、新たな選択肢ができると思うんです。だから毎年、木頭学園で子どもたちへ講演をしたり、外国の方を木頭へお連れしたり、会社を作って雇用を創出したりしています。それによって、少

しも刺激を感じてもらえれば」

故郷では、子どもたちに「こんな村で一生終えるのではなく、出て行った方がいい」と言う親もいれば、「帰ってこい」と言う親もいる。

「もし親が、木頭には、こういう働き先と明るい未来への希望がある」と胸を張って子どもたちへ言えたら、結果はズいぶん違ってくると思います。僕はその希望の糸口を作るためにやっています」

藤田さんが最初に注目したのは木頭ゆず。『桃栗3年柿8年、柚子の大馬鹿18年』とも言われるように、柚子は実をつけるまで18年かかる果実。ところが藤田さんの父の時代、地元の研究会が研究と工夫を重ね、今では3年に短縮できる栽培方法を確立。もともと木頭の風土が柚子栽培に適していると高く評価され、その品質を認められていた「木頭ゆず」は全国に流通するようになり、国内外の料亭やシェフに愛されるようになった。

13年に設立した株式会社黄金の村は、かつて父が語った「この村を柚子で黄金色にして、もっと豊かにしたい」という言葉から名づけた。木頭ゆずを食用だけでなく柚子の花言葉「健康美」にフォーカスして、コスメや雑貨など、さまざまなカテゴリで商品化。国内だけでなくフランス、ドイツをはじめとした海外への

輸出も増やしている。

木頭への思いは、未来の主役となる子どもたちへも向けられる。未来を担う子どもたちへ、たくさんの文化や人生に触れ刺激を受けて、無限の可能性を広げてほしい、との願いを込めたコンセプト「子どもは未来から来た未来人」のもと2020年に作られたのが「未来コンビニ」だ。

人口1000人で過疎高齢化が進むこの地の、さらに居住人口200人の集落に、「世界一美しいコンビニ」をデザインコンセプトに設計された。コンセプトの背景と、地域のストーリーに密接に関わるデザイン設計が評価され、オープン2年目となる2021年には国際的なデザインアワードを連続受賞。2021年12月現在、なんと国内外の名だたるデザインアワード10冠に輝いている。

「ただ商品販売する場だけとしてのコンビニではなく、誰もが気軽に集まれる交流の場としても機能するようカフェスペースも設置し、地元の方や旅行者の方のコミュニケーションが生まれています。今や木頭のシンボルの様な存在になっています」

藤田さんは、メディアアドゥの新入社員を必ず木頭に連れていく。2018年にオープンした「CAMP PARK KITO」